

夢と奈良・平安時代。

昔、備中国に郡司ありけり。それが子に、ひきのまき人といふ有り。わかき男にて有ける時、夢をみたりければ、あはせさせんとて、夢ときの女のもとに行て、夢あはせて後、物語してゐたる程に、人々あまた声して来なり。国守の御子の太朗君のおはするなりけり。年は一七八ばかりの男にておはしけり。心ばへはしらず、かたちはきよげなり。人四五人斗具したり。「これや夢ときの女のもと」と問へば、御供の侍「これにて候」といひて来れば、まき人は上の方のうちに入て、部屋のあるに入りて、穴よりのぞきて見れば、此君、いり給、「夢をしかじか見つるなり。いかなるぞ」とて、かたりきかす。女、聞きて、「よにいみじき夢なり。必大臣までなりあがり給也。返々、めでたく御覧じて候。あなかしこあなかしこ、人にかたり給な」と申ければ、この君、うれしげにて、衣をぬぎて、女にとらせて、かへりぬ。

その折、まき人、部屋より出て、女にいやふう、「夢はとるといふ事のあるなり。この君の御夢、われらにとらせ給へ。国守は四年過ぬれば返りのぼりぬ。我は国人なれば、いつもながらへてあらんずるうへに、郡司の子にてあれば、我をこそ大事に思はめ」といへば、女「のたまはんまゝに侍べし。さらば、おはしつる君のごとくにして、いり給て、その語られつる夢を、露もたがはず語り給へ」といへば、まき人悦て、彼君のありつるやうに、入り来て、夢がたりをしたれば、女おなじやうにいふ。まき人、いとうれしく思て、衣をぬぎてとらせて去りぬ。

その後文をならひよみたれば、たゞ通りに通りて、才ある人になりぬ。おほやけ、きこしめして、試みらるゝに誠に才深くありければ、もろこしへ、「物よくよくならへ」とて、つかはして、久しくもろこしにありて、さまざまの事どもならひつたへて歸りてりければ、御門、かしこき者におぼしめして、次第になしあげ給て、大臣までになされにけり。

されば夢とることは、げにかしこきことなり。かの夢とられたりし備中守の子は、司もなきものにて止みにけり。夢をとられざらましかば、大臣までも成なまし。されば、夢を人に聞かすまじきなりと、いひつたへける。

¹ 傍線は読解に役立つ重要語だから辞書で調べる。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。駒沢大テキスト使用